

ここ二〇年ほど水にはまり、面白い水、不思議な水、うまい水などを探し求めてきました。インドのバラナシではヒンズーの人々と同じように肩まで泥流につかり、味のチエックもしてきました。国内では名水百選（旧環境庁）の取材もほぼ終えようとしています。各地で採水したサンプルの小ビンがたまり大型冷蔵庫におさまりきらず、食器棚から台所の床にまであふれています。

そういえば私と水の関わり合いは出生と同時に始まっています。生家は琵琶湖のすぐ近くで、敷地内には湧水の井戸が数本と池や幅一メートルほどの川も流れていました。少年時代の遊び場は近所の小田川（こたがわ）という長さ三〜四キロメートルの清流でした。素手による魚つかみがメッチャおもしろくてやめられず毎日毎日通い詰めました。喉がかわけば川の水をガブ飲み。亀や蛙や蛇などは気心の知れた親友。家族からも河太郎（カッパ）呼ばわりされるほどの水少年でした。

ここで時空が一九九八年七月二日にワープします。五九歳の私は大阪府茨木市にある府営水道の村野浄水場にあります。ラジオパーソナリティとしてこの浄水場で高度浄水処理された新しい水道水が初送水

プロフィール  
1939年滋賀県生まれ。ラジオパーソナリティ。大阪の毎日放送などで活躍中。2008年2月からインターネットラジオJOBBBを家族で運営（http://jobbb.sakura.ne.jp/）。おもしろそうなことを求めて興味のおもむくまま国内外をボラボラ歩きまわっている。



## 私の母川回帰

ばんぼ ふうみ お  
馬場 章夫

される様子を取材しているところで。当時の大阪の水道水は原水である淀川の汚れからくるトリハロメタンの問題や塩素臭やカビ臭などでもともに飲めるものではなかったのです。その対策の切り札として登場したのが高度浄水処理というわけです。ボタンが押され送水がはじまります。取材の我々にも冷やされた新水道水がコップで配られました。記者やレポーターたちから「臭くない」「におわない」「うまい」の連発。

当時うまい水の現地取材を一〇年ほど続けていた私は飲み方が違う。コップを両手で水温二〇度ほどになるまであたたためてから鼻にかざす。「悪臭なし」次に慎重に口にくむ。と、その瞬間舌に高圧電流をかけられたようなショック。何と何故だか突然口の中にあの小田川でガブのみしていた水の味が、水少年の日々の生々しい記憶と共に総天然色で再現されました。小田川から流れ出した微粒子のような物質が琵琶湖から淀川を経てこの二〇〇ccコップにはいった。私は動転しながらサケ、マスの母川回帰に思いをはせました。それにしても水って本当に面白い。人類を含む生物の未知の部分や謎が水によって解明できるのではないかもっともっと水を追いかけてみたい。

## 月刊 みんなぱく

12月号目次

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>私の母川回帰 馬場 章夫</p> <p>2 特集 家畜にみる生き物の多様性</p> <p>3 アジアの家畜は人類文明の鏡 池谷 和信</p> <p>5 美味しい牛肉の探求と品種の多様性-日本- 万年 英之</p> <p>6 家畜の生活から考える多様性-モンゴル- 小長谷 有紀</p> <p>7 ユーラシア最古のブタの危機-バングラデシュ- 池谷 和信</p> <p>8 「牛舎」と「家畜養護院」-インド- 篠田 隆</p> <p>9 生ける文化財の保存と動物園-日本- 小宮 輝之</p> <p>10 研究フォーラム<br/>在野の知のひろがりへ<br/>重信 幸彦</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行<br/>三位一体型寺院<br/>スワミナーラーヤン・アクシャルダム<br/>山本 達也</p> <p>15 みんなぱく 私の逸品<br/>『夷酋列像図』<br/>佐々木 史郎</p> <p>16 散策と思索の径<br/>「闇の聖地」で、音に触る<br/>廣瀬 浩二郎</p> <p>18 多文化をささえる人びと<br/>すべてのひとに文字とことばをふたたび<br/>—— 夜間中学の今<br/>庄司 博史</p> <p>20 歳時世相篇<br/>「世界最大」の音楽シーズン<br/>寺田 吉孝</p> <p>22 フィールドで考える<br/>泥のモスクはだれのもの<br/>伊東 未来</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|